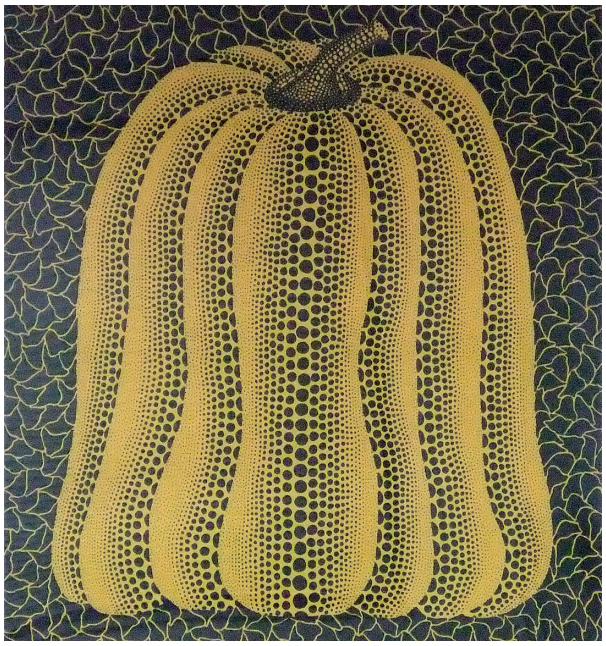
漢字と情報

No. 17
2008・10

京都大学人文科学研究所　Documentation and Information Center for Chinese Studies (DICCS)
附属漢字情報研究センター　Institute for Research in Humanities, Kyoto University



● シルクロード発掘70年
　——雲岡石窟からガンダーラまで——
● 「愛日軒陸貞一」のこと
● 人文研アーカイブス⑰草間彌生《南瓜》

漢字と情報 2

シルクロード発掘70年
―雲岡石窟からガンダーラまで―

向井佑介

京都大学総合博物館では，平成20年秋期企画展として，９月１日から12月27日まで，「シルクロード発掘70年―雲岡石窟からガンダーラまで―」と題する展覧会を開催した。これは，人文科学研究所を中心に，京都大学が70年にわたって推進してきた，中国石窟寺院とガンダーラ仏教寺院址の調査成果を公開するものである。

人文科学研究所では，その前身である東方文化学院京都研究所の時代から，仏教寺院遺跡の調査を継続してきた。その歴史は，水野清一と長廣敏雄が1936年に響堂山石窟と龍門石窟とを調査したことにはじまる。このときの調査は，南響堂山石窟で７日間，龍門石窟で６日間と，ごく短期間にとどまったため，より本格的な調査が切望された。折しも翌1937年には日中戦争が勃発し，中国内地での調査はさらに困難を増していった。そこで目をつけたのが，華北地方最大の石窟のひとつ，雲岡石窟であった。

雲岡石窟は，山西省大同市の西16 km にある北魏の石窟寺院である。その調査は，東方文化学院が解体し，東方文化研究所として出発した1938年から1944年の終戦まで，７年間にわたって実施された。調査には，水野清一と長廣敏雄のほか，研究所の内外からのべ60人あまりが参加した。雲岡石窟の調査において特筆すべきは，測量・拓本・写真撮影を３本の柱とし，大小の石窟をくまなく調査したことである。それは，仏像のみに注目するそれまでの調査とは異なっていた。仏像の彫られた石窟全体の構造を明らかにし，さらに石窟の周囲にも調査の範囲を拡大することで，石窟寺院全体の構造と，石窟造営当時の歴史的環境を解明しようと試みたのである。世界に先駆けて実施された，石窟寺院の全面的な学術調査であった。

終戦後，『雲岡石窟』全16巻32冊としてまとめられた大部の報告書は，世界的に高い評価をえた。しかし，中国での石窟寺院の調査は断念せざるをえなくなった。そこで水野らは，仏教文化の源流をさぐるため，ガンダーラの地に新たなフィールドをもとめたのである。

水野を中心として1959年に組織された京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン調査隊は，考古美術班・地理班・歴史言語班・人類班の４班からなり，1967年までに７次の総合的な学術調査を実施した。なかでも，仏教遺跡をはじめ各時代の文化遺産を調査したのが，考古美術班であった。パキスタンでは，ガンダーラ屈指の規模をほこるタレリ寺院址のほか，メハサンダ寺院址やチャナカ＝デーリなどの遺跡を発掘した。アフガニスタンでは，ラルマ寺院址やハイバク石窟など仏教遺跡の調査に加えて，チャカラク＝テペやドゥルマン＝テペなどを発掘調査している。

アフガニスタンやパキスタンでは，イギリスやフランスなど各国の調査隊が早くからさかんに調査を進めていた。しかしそれらは，遺跡の中枢のみを対象とする調査であり，遺跡全体を把握しようとする意識は低かった。そのなかで水野らが，仏教寺院址の全体をくまなく精査し，また遺物の出土地点を正確に記録して報告したことの意味は大きい。それは，寺院全体の構造と，それをとりまく歴史的環境とを明らかにしようとした，雲岡石窟の調査経験にもとづくものであった。

その後，1970年から1980年には，文学部の樋口

（写真１）

隆康が隊長となって京都大学中央アジア学術調査隊を組織し，アフガニスタンのバーミヤーン石窟やタパ＝スカンダルの調査をおこなった。さらに1983年から1992年には，工学部の西川幸治が組織する京都大学学術調査隊が，パキスタンのラニガト寺院址を発掘調査している。

残念なことに，京大隊が調査したこれらの遺跡の多くは，人為的な破壊や自然風化の危機にさらされている。ガンダーラでは，各地で盗掘が横行し，文化財の海外への流出がやまず，遺跡の荒廃は進む一方である。とりわけアフガニスタンの内戦のさなか，2001年にバーミヤーンの東西二大仏が，タリバーンによって爆破されたことは記憶に新しい。イラン・アフガニスタン・パキスタンの地は，現在も不安定な情勢がつづいており，現地での継続的な調査は難しくなっている。

このような不幸な現状において，京大隊が継続してきた調査の意義は，いっそう重要性を増している。人文研が所蔵する調査当時の写真・図面・日誌などの資料は，すでに失われた遺跡のすがたを伝えるかけがえのない記録である。

本企画展を構成するふたつの展示室のうち，パネル展示室の入口には，雲岡石窟とバーミヤーン石窟の全景写真が左右に対峙し，その奥には雲岡石窟菩薩像の石膏模型とバーミヤーンの壁画写真をならべた（写真２）。人文研が所蔵するこれら両石窟の写真資料は，世界的にも貴重な記録である。人文研ではその電子化を進めており，バーミヤーン石窟については，一部の写真をすでにウェブ上に公開している。70年にわたる調査の歴史をふりかえるとともに，その蓄積の上にたった最新の研究活動を紹介することが，このパネル展示の目的であり，この巨大な雲岡石窟とバーミヤーン石窟の写真は，その象徴ともいえよう。

（写真２）

もうひとつ，本企画展を特徴づけるのが，500点をこえる出土資料の公開である。文物展示室に陳列した資料のほとんどは，人文研が保管する雲岡石窟とガンダーラ寺院址の出土遺物（写真１）である。雲岡石窟の発掘資料には，石窟の周囲から出土した石彫の破片や瓦・土器・陶磁器など約150点があり，ガンダーラ寺院址の遺物は，石彫像・ストゥッコ像・土器など約350点である。

雲岡石窟の発掘資料は，研究のサンプルとして持ち帰った小型品が多く，大型の仏像や瓦などは，現地に残された。ガンダーラ寺院址の出土資料は，1967年にパキスタン考古局との協定のもと，一部が京大隊に分配された。

壮大な雲岡石窟やガンダーラ寺院址の全体にくらべれば，これらの遺物はごく貧弱なものにすぎない。しかし，そこから遺跡を復元し，歴史を語ることは，正しく発掘され，記録された出土遺物にしか許されない。発掘資料が提供する情報には，盗掘品とは比較にならない重みがある。さまざまな要因により，遺跡を現地において再確認することが難しくなったいま，調査の記録とこれらの遺物が，遺跡本来のすがたをさぐる大きな手がかりとなっている。その意味で，本企画展において紹介した人文研保管の遺物や調査資料は，今後の研究の進展に寄与するだけでなく，遺跡保存の面においても重要な役割を果たすものであろう。

（センター助教）

漢字と情報 4

「愛日軒陸貞一」のこと

高井たかね

「愛日軒陸貞一」のこと，といっても，たぶんどんな人物のことだかおわかりにならないだろう。単なる「愛日軒」であれば，『明史』や『清一統志』の編纂で知られる清初の学者，徐乾学のことを思い浮かべる方もおられようが，ここではまた別の人物である。彼には「漢籍を見る会」でお目にかかった。

「漢籍を見る会」は，毎週水曜の午後に人文研分館の書庫でおこなわれている勉強会で，『東方文化学院京都研究所漢籍目録』所載の漢籍を順に取り上げ，書物の内容よりも，その本がいつどうやって刊行され，またその後どのような経緯を経て我々の目の前にあるのかということを主に考える会である。「見る会」とはそういった意味合いであって，「読む会」ではない。この会については，本誌 No. 12にて大西賢人氏が，No. 15では永田知之氏がすでにご紹介したとおりである。三度目ともなれば，あらためて詳述する必要も付け加えることもそうないので，ここで述べるのは，「見る会」で出くわした事柄に関する簡単な覚え書きとちょっとした感想である。

「見る会」では，毎回担当者を決めて事前にレジュメを準備し，会での議論をもとに補訂，漢籍データベースの書誌情報画面にリンクする「典拠情報」としてデータをアップする。「典拠情報」についても永田氏が報告済みなので，そちらをご参照いただきたい。「典拠情報」では，主に刊行年，刊行者などの書誌情報の典拠となる情報を，ほかに本の構成，序跋，蔵書印，出版に関わった人物の基本情報などが記載されるのだが，あるいは特に目についた事柄や，担当者の興味を引いたことなど，さまざまな情報が盛り込まれる。刻工についてもその一つである。

本所所蔵の潛説友撰『咸淳臨安志』一百卷，『東方文化学院京都研究所漢籍目録』ではその鈔刻を「道光十年錢唐汪遠孫振綺堂據宋本重刊，光緒十七年姪曾唯補刊」としている。刊行者の振綺堂は，汪憲，汪汝璉，汪誠，汪遠孫が代々主人を務めてきた蔵書楼で，また多くの書籍を刊行している。汪遠孫（1794–1836）は，字は久也，号は小米，嘉慶二十一年の挙人である。

この本の卷末には刊行者汪遠孫自身による道光十一（1831）年の跋文があり，その末葉末行には「杭州愛日軒陸貞一董栞」とみえる（図左）。「董栞」とあるように，「陸貞一」は刊刻を取り仕切る刻工の親方的な存在であり，また「愛日軒」は彼が率いる刊刻所，刊刻工房といったところであろう。

さて，刻工の名前が分かれば，その人物がどんな本を刊刻しているかを張振鐸編『古籍刻工名録』（上海書店出版社，1996）で調べることができる。そのほか漢籍データベースなどを利用して補足すると，下に挙げた本に愛日軒や陸貞一の名を確認することができた。刊記や序跋をもとに仕事がおこなわれた時期を推測すると，おおかた以下のような順序になる。

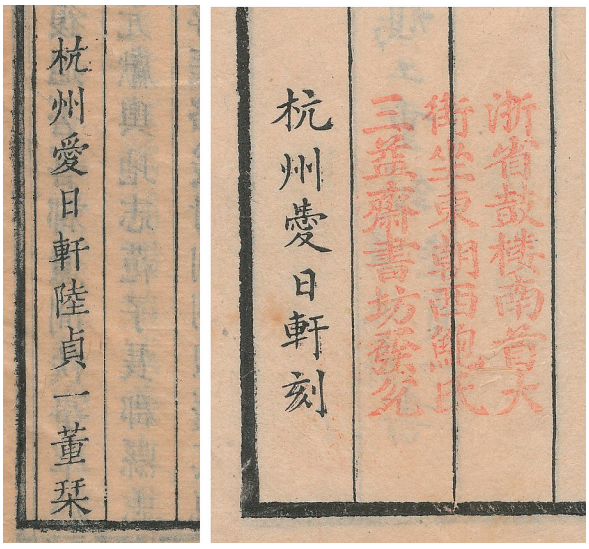
①岳飛撰『岳忠武王集』八卷坿梁玉繩撰『年譜』一卷，嘉慶十二（1807）年錢塘梁氏刊本（京大人文研蔵）
卷八末に「杭州愛日軒陸貞一監刊」。

②梁同書・梁玉繩・梁履繩撰『梁氏叢書』嘉慶中刊本（京大人文研蔵）
うち梁同書撰『頻羅庵遺集』十六卷の卷十六末に「嘉慶二十二（1817）年歳在丁丑七月之夕，仁和陸貞一刊畢」，梁履繩撰『左通補釋』三十二卷の卷三十二末に「杭州愛日軒陸貞一董栞」。

③何治運撰『何氏學』四卷，嘉慶二十四（1819）年瑞室刊本（京大人文研蔵）
卷四末に「杭州愛日軒雕版」。

④翁元圻撰『困學紀聞注』二十卷，道光五（1825）年餘姚翁氏守福堂刊本（京大人文研蔵）
卷二十末に，「道光五年乙酉正月開雕，八月竣工，杭州愛日軒陸貞一董刊」。

⑤劉墉撰『劉文清公遺集』十七卷『應制詩集』三卷，道光六（1826）年東武劉氏味經書屋刊本（京大文学部蔵）
『遺集』巻一末に「杭州愛日軒陸貞一仿宋鐫」，巻末道光六年劉喜海跋文末に「杭州愛日軒陸貞一仿宋鐫」。『應制集』巻一末に「杭州愛日軒陸貞一仿宋鐫」。
⑥查爲仁・厲鶚同撰『絶妙好詞箋』七卷余集輯『續鈔』一卷徐楙輯『又續』一卷，道光八年九年（1828，1829）錢塘徐氏刊本（京大人文研蔵）
目録に続けて「道光八年夏，錢唐徐楙問蘧鳩工重録，章純齋陸貞一書」，目録末葉末行に「杭州愛日軒刻」（図右。人文研所蔵本には，右側に「浙省鼓楼南首大街坐東朝西鮑氏三益齋書房發兌」の発兌印が捺されている。）。巻六末に「杭城任九思刻」，『續鈔』末には「武林任九思刻」とみえる。
⑦周之琦撰『金梁夢月詞』二巻坿『懐夢詞』一巻，清刊本（立命館詞学文庫蔵）。『懐夢詞』第一首序に「道光己丑」（九年，1829年）とみえ，刊行はこれ以降。
『夢月詞』上，下，『懐夢詞』の各巻末に「杭州愛日軒陸貞一仿寫幷栞」。
⑧潛説友撰『咸淳臨安志』一百巻坿『札記』三巻，道光十（1830）年錢唐汪氏振綺堂據宋本重刊，光緒十七年姪汪曾唯補刊（京大人文研蔵）
道光十一（1831）年汪遠孫跋文末に「杭州愛日軒陸貞一董栞」。
⑨王宗炎撰『晩聞居士遺集』九巻首一巻，道光十年十一年（1830，1831）男王端履等刊本（京大人文研蔵）
巻首末および各巻末に「杭州愛日軒陸貞一仿宋寫幷董栞」。
⑩汪遠孫輯『清尊集』十六巻，道光十九（1839）年錢唐汪氏振綺堂刊本（京大人文研蔵）
巻十六末に「武林愛日軒朱兆熊栞」。
⑪陳其泰輯『宮閨百詠』四巻，道光二十五（1845）年海鹽陳其泰桐華鳳閣刊本（京大附属図書館陶庵文庫蔵）
巻四末「武林愛日軒朱兆熊刊」。
⑫陳奐撰『詩毛氏傳疏』三十巻『毛詩説』一巻，道光二十七（1847）年呉門陳氏掃葉山莊刊本（京大人文研蔵）
各冊末葉辺欄外，『毛詩説』末に「武林愛日軒朱兆熊鐫」とある。
⑬丁丙輯『西泠五布衣遺著』三十二巻，同治光緒間錢唐丁氏當歸草堂刊本（京大人文研蔵）
うち同治十一（1872）年刊，奚岡撰『冬花庵燼餘藁』三巻の各巻末に「武林愛日軒陸貞一監録」。
　なお，『古籍刻工名録』では，陸貞一の刻とし



て顧湘撰輯『呉郡五百名賢図伝賛』道光九（1829）年長洲顧沅刊本も挙げ，「張錦章刻，孔継堯（蓮卿）画。章純齋・陸貞一書，杭州愛日齋刻。」とのコメントがつけられている。『呉郡五百名賢図伝賛』とは，『呉郡名賢図伝賛』のことであろうが，張錦章，孔継堯の名は確認できるものの，本所所蔵本ほか数本をみても陸貞一や愛日軒の名はみえない。誤りであろうか。

こうして陸貞一，あるいは愛日軒が刊刻した漢籍を列挙してみると，最後の『冬花庵燼餘藁』の刊行時期がずいぶん遅いのが少々気にかかるものの，その活動期間は嘉慶から同治年間にかけて，また『金粱夢月詞』に「杭州愛日軒陸貞一仿寫并栞」，『晩聞居士遺集』に「杭州愛日軒陸貞一仿宋寫并菫梨」などと見えることから，陸貞一が写字をおこなっていたのが明らかである。『絶妙好詞箋』には「章純齋陸貞一書」とあるのをみれば，「章純齋」とも称したことが分かる。

『清尊集』，『宮閨百詠』や『詩毛氏傳疏』，『毛詩說』にみえる朱兆熊という人物だが，こちらも「武林愛日軒」と称している。同じ土地で同じ屋号を名乗っていることから，陸貞一の刊刻所に刻工として抱えていたようだ。今回の調査では愛日軒の屋号なしで朱兆熊の名を見ることはなく，その名が見えるのは，愛日軒の活動時期後半に集中する。また，『絶妙好詞箋』にみえる任九思，こちらは陸貞一とともに『絶妙好詞箋』中に名がみえるが，愛日軒の屋号を名乗らない。あるいは朱兆熊と同じく愛日軒の刻工かもしれないが，これだけではよく分からない。彼については，『中国版刻綜録』（楊繩信編著，陝西人民出版社，1987）に葉申薌撰『小庚詞存』三巻（『中国版刻綜録』は『小庾詞存』と誤る），光緒二十一（1895）年刊本の刊行者として「銭塘任九思」がみえ，北京師範大学図書館に所蔵するそうだが，未見である。

一方，刊刻を依頼する刊行者の側に目を転じてみると，たとえば『咸淳臨安志』の刊行者である汪遠孫は，自身が編輯した『清尊集』十六巻も「愛日軒朱兆熊」に刻字を依頼しており，また『詩毛氏傳疏』には，巻首の條例末尾に「……杭郡西湖水北樓友人汪亞虞，聳恩爲之，亞虞名适孫，遠孫之弟，有振綺堂，藏書極富，庚子四月六日開雕，丁未八月七日雕成」と汪遠孫の弟适孫がその出版を勧めたことがみえ，こちらも銭唐汪氏一族が出版に関わったことがみてとれる。このように，愛日軒は汪氏の関係者から複数の書籍刊刻を請け負っているのだが，この点は振綺堂がおこなった出版事業の実際的な面を少々垣間見られて興味深い。逆に，振綺堂が出版した書物のうち，愛日軒の手がけたものがどれくらいの割合で存在するのか，ほかにどんな刻工に依頼しているのかといった点も分かればおもしろいが，こちらはまた機会があればということにしておきたい。

さて，この度の調査はこれで手詰まりになってしまったが，「見る会」はこれからも続く。とりあえず今回は，ある刊刻所とそこに所属する刻工の活動状況，その依頼主に関する情報をいくらか得ることができたが，今後さらに「典拠情報」を積み重ね，情報量を増やしていけば，あやふやだった疑問も解消し，あるいは依頼主と刻工との関わりや当時の刊刻をめぐる状況が，よりはっきりと浮かび上がってくるかもしれない。

実は先日，「見る会」例会では，「典拠情報」のデータベース化を見越して，そろそろ記載内容や書式を統一しようじゃないかという話が出た。とりあえず典拠情報に記載する項目や書式をひととおり統一してみたものの，今のところそれ以上の進展はない。まずは「典拠情報」のデータを積み上げることの方が先である。しかし，今後実際に，刻工の情報をはじめとした「典拠情報」の記載事項を検索機能をつけて供することができれば，漢籍の出版，流通など，関連する研究領域を益することもあるだろう。

（人文科学研究所助教）

人文研アーカイブス（17）

草間彌生《南瓜》

版画　99×79 cm　1986年

高階絵里加

昨年，今出川通り沿いの新しい建物に引っ越した人文科学研究所本館二階の図書閲覧室には，一点の絵が掛けられている。縦一メートル弱のやや縦長の作品で，版画としては比較的大きなサイズだろう。画面ほぼいっぱいに鎮座しているのは，一個の黄色いカボチャ。いわゆる写実的に描かれているわけではないが，かたい表皮のちょっといびつな隆起，そのどっしりとした重量感，へたの微妙な曲がりぐあいなどには，たしかにカボチャだとうなずかせるものがある。

カボチャの表面は大小の黒い水玉模様でおおわれ，それはでこぼこした野菜の立体感の表現になっているのだが，しばらく見ていると，水玉模様それ自体が黒くざわざわとうごめく生き物のようにも感じられてくる。そのうちに，そのざわめきが画面からはみ出してこちらの体の中にまで浸入してくるような気分におそわれるが，それは決して不快な感覚ではない。

一見静かに立っている大木の幹に耳をあてると，「ゴーッ」という激しい流れの音が聞こえることがあるという。植物は根から地中の水分を吸い上げ，細い枝葉のすみずみにまで送り届ける。かたく干からびた皮の下では，大地から生命の源をくみ上げて新しい芽吹きをうながすいとなみが，一瞬も途切れることなくおこなわれている。

よく，野菜や花が「みずみずしい」というが，それはまさに植物の内部を水がめぐりめぐっている状態をあらわすのだろう。花瓶に挿した切花も，収穫後の野菜も，大地から切り離されてしばらくは，たくわえた水分と養分で生きている。カボチャはとくにもちがよく，丸のままなら台所の隅にころがしておいても一ヶ月くらいはくさりもせずおいしく食べられる。それだけ生命力の強い野菜なのだ。この黒い水玉模様は，まだ収穫まもないカボチャのなかで勢いよく循環している水分の泡のようにもみえる。

植物が生きるのに不可欠なもうひとつの要素，光は，ここでは黄色い色で象徴されている。黄色をカボチャそのものの色と考えることももちろんできるが，黒が水なら黄色はやはり光だろう。太陽と大地のエネルギーをいっぱいに吸収して，でも静かに落ち着いて，カボチャはそこにある。

作者である草間彌生は，「私がカボチャに造型的興味を受けたのは，その太っ腹の飾らぬ容貌なのだ。そして，たくましい精神的力強さだった」と語る。一九二九年長野県松本市生まれの草間は，四人兄弟の末娘。実家は種苗業を営む裕福な旧家で，家の周囲には種や苗を採るための花畑や野菜畑が広がっていた。十代より家で栽培している花々をスケッチしていたという。植物に対する精緻な観察力，その充実した生命力への鋭敏な感受性は，すでに一九四八年の絵画《玉葱》にあらわれている。

草間彌生のカボチャは世界中の人々の心に訴え，とりわけ近年は若い女性たちが版画やグッズ（このカボチャは置物，Ｔシャツ，手ぬぐい，鏡，ストラップなどさまざまなグッズに商品化されている）を買い求めてゆくという。「太っ腹」で「たくましい」カボチャの力が，愛を探すことに疲れた彼女たちを癒すのかもしれない。そういえばシンデレラの馬車も，もとはカボチャであった。

この《南瓜》は，かつて人文研に勤務していた浅田彰氏を通じて作者ご本人より人文研に寄贈を受けたもので，移転を機に多くの方々に見ていただけるようにと，図書の閲覧室に展示している。

（人文科学研究所准教授）

漢字と情報 8

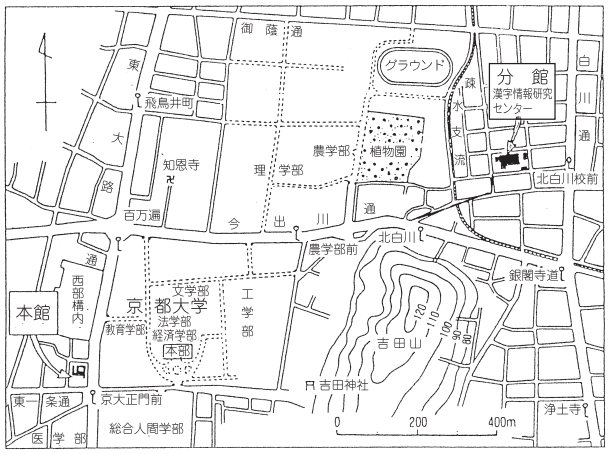
HP・TOPICS

昨年度末に東一条にあった人文研本館は，本部構内に引っ越した。新館は，農学部前の門から入ってすぐの元土木工学科第５号館である。閲覧室は２階西側にあり，書庫内には電動書架を配備した。閲覧室は広々としており，壁には素敵なカボチャの絵も飾ってある。その作品を今回の人文研アーカイブスに取り上げ，美術史の専門家である高階絵里加さんに解題を執筆してもらったので，ご参照いただきたい。また改修の際に，倉庫を整理して様々な資料が出てきたので，次号にもお宝を紹介する予定である。

移転に伴って，センターでの運用であった東方部和書，洋書，中江文庫，村本文庫，矢野文庫などは一括して移管した。図書利用規程も改正を検討中であり，利用しやすい環境を整備しつつある。

ただし，分館に収蔵しているは従来通り別扱いである（センター図書利用規程を参照のこと http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/ ～ center2f/kitei.htm）。また，上記以外にも新館の図書室，研究室に移した図書があり，即日運用できないものが多数ある。具体的な所蔵確認等について，文書またはFAXで事前に問い合わせていただくほうが無難である。

なお，新館改修工事がいい加減で，書庫内にホルムアルデヒドが高濃度に発生し，休室を余儀なくされている。まことに遺憾なことであるが，換気を行って放散量の計測を行い，次第に基準値を下回るようになってきたので，年明けにはなんとか開室できる見通しである。夏になって亡霊のごとく再び立ち現れないことを祈りたい。



【DICCS NEWS】

・６月10日（火）に，中国社会科学院より趙燕平図書館副館長，何培忠国外中国学研究中心副主任，解莉莉国際合作局亜非処長の三名の先生方がセンターを視察に来られた。センターの運営モデルシステム，学術情報サービスにおける機能と役割，電子化の現状と今後の方針等について，説明交流会を開催した。

・６月23日（月）14:00–17:00に四名の評価委員の先生方を招いて漢字情報研究センター外部評価委員会を開催した。センターが設立以来推進してきた事業全般にわたる評価と今後の課題についてご意見，ご提案を頂戴し，来春のセンター改組に向けて有意義な討議を行うことができた。評価委員は，猪木武徳教授（国際日本文化研究センター），大木康教授（東京大学東洋文化研究所教授），杉本憲司教授（佛教大学文学部，委員長），宮澤彰教授（国立情報学研究所）である。

・2008年度の漢籍担当職員講習会は，10月６日（月）～10月10日（金）に初級を実施し，20名の修了者があった。中級は11月10日（月）～11月14日（金）で，17名の参加を予定している。
講師陣は，所外からの講師には，初級は高橋智准教授（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫）を招き，和刻本について講義してもらった。中級は，宇佐美文理准教授（文学研究科），道坂昭廣准教授（人間・環境学研究科），濱田麻矢准教授（神戸大学人文学研究科）に経部，集部，現代中国書についてそれぞれ講義してもらう予定である。

・最新のセンター刊行物
「東洋学文献類目」2005年度（2008年３月）
「東洋学文献類目」2005年度補遺版（2008年３月）
『外部評価委員会報告書』（2008年８月）
『三国鼎立から統一へ―史書と碑文をあわせ読む』
（京大人文研漢籍セミナー２，2008年10月）

発行日　2008年10月31日

発行所　京都大学人文科学研究所附属
漢字情報研究センター

〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47
電話 075-753-6997　FAX 075-753-6999
http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/